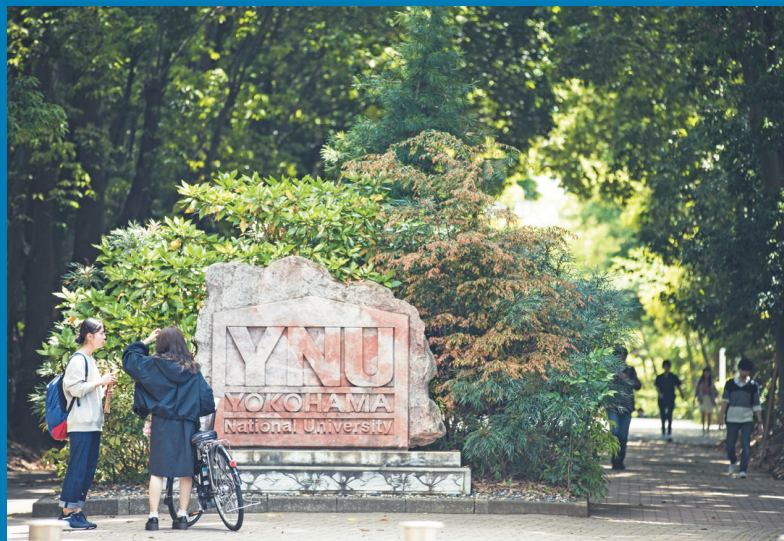


## CONTENTS

- P1 巻頭言 遠隔授業の令和2年  
高大接続・全学教育推進センター センター長 関谷 隆夫
- P2 「授業アンケート」および「遠隔授業に関する教員アンケート」からみる  
春学期遠隔授業の実態と課題  
高大接続・全学教育推進センター 安野 舞子
- P8 大学教育の質保証④ 速報：学生は遠隔授業をどう受け止めたか  
大学院教育強化推進センター／高大接続・全学教育推進センター 市村 光之
- P12 CENTER NEWS



## 遠隔授業の令和2年

高大接続・全学教育推進センター センター長 関谷 隆夫

コロナウイルス感染症の拡大を受け、令和2年度の開始直前の3月26日に本学として、授業開始日を5月7日に変更する決定がなされ、4月7日には政府から緊急事態宣言が発出され、大学の機能が事実上ストップし、学生、教職員をはじめすべての方にとって初めての事態となりました。それでも停滞は許されません。大学の重要な使命のひとつである「授業」の実施について、「遠隔で行う」という方針が出され、授業支援システムの増強やオンデマンドビデオサーバの新設、遠隔会議システムの導入など、教育インフラについても短期間で増強・整備を実施することができました。また、多くの教員にとって、短い準備期間の中で講義内容を「如何に伝えるか」を考えた時期でもありました。特に、新入生に対しては、本学に登校したこともなければ、ネットワークIDすら知らないという状況で、履修登録から、講義受講に至るまで、対応にあたった教務担当の先生方の奮闘があったことと思います。授業の実施側も受講側も初めてのことが多く、多少の混乱があったものの、多方面にわたる多くの教職員の尽力と画像を見続けるという学生の忍耐により、無事に(?)春学期を終えることができたのではないかと思います。皆様に感謝申し上げます。

コロナウイルス感染症拡大に収束が見えない中、短くなった第3タームから遠隔で実施が難しく、卒業・進級のために重要な一部の科目について、感染対策を施した

上で対面授業の実施が認められるようになったものの、秋学期も基本的には遠隔での授業開講となりました。授業準備に多くの時間を割く必要がある遠隔授業ですが、春学期の授業アンケート結果を見る限り、通常の対面授業よりも優れた点も多く見受けられることが判ってきました。本学における情報端末の完全必携化(BYOD)の令和6年度が近づく中、遠隔授業は新しい授業形態のひとつとして、今後の改善を検討し、発展させるべき授業ツールと考えています。高大接続・全学教育推進センターとしても、遠隔授業を本学の教育改善活動の対象として捉え、今後様々な面で協力できる体制を準備したいと考えています。秋学期の授業担当教員の皆様には、春学期の経験や蓄積を活かし、より良い遠隔授業の実施を心がけていただきたいと願っています。

最後になりましたが、本誌「AP/FDニュースレター」について言及しておきます。APとは、大学教育再生加速プログラム(Acceleration Program for University Education Rebuilding)のことを意味しています。この事業は令和元年度末に終了しましたが、高大接続・全学教育推進センターではこの事業を通じて得た知見を本学の教育改善において維持、発展させるために、本誌にAPの文字を残すこととしました。引き続き、高大接続・全学教育推進センターの活動にご理解・ご協力を賜りますよう、どうかよろしくお願い致します。

# 「授業アンケート」および「遠隔授業に関する 教員アンケート」からみる春学期遠隔授業の実態と課題

高大接続・全学教育推進センター 安野 舞子

## はじめに

新型コロナウイルス感染症の影響により、全面的に遠隔授業となった2020年度春学期。この遠隔授業の実態と教育・学習効果を把握すべく、高大接続・全学教育推進センターでは、学生には「授業アンケート」、教員には「遠隔授業に関する教員アンケート」を実施しました。授業アンケートについては、2019年度秋学期から従来の設問項目を大きく変更しましたが、この春学期については、遠隔授業に合わせた項目を設定しました。一方、教員アンケートについては、授業アンケートを実施した科目において担当教員が作成することになっている自己点検票の入力フォーマットにアンケート項目を追加する形で実施しました。両アンケートの集計・分析結果は、教務厚生部会や教育開発・学修支援部会で報告しましたが、本ニュースレターではその報告内容のうち、特に重要と思われる項目を抽出して報告させていただきます。

## 「授業アンケート」からみる春学期 遠隔授業の実態と課題

### 1) 授業アンケート実施概要

実施期間：2020年8月6日～8月28日

開講部局	対象科目数	実施科目数	実施率	実施科目の受講者数	回答者数	回答率
全体	1016	952	93.7%	69380	25166	36.3%
教育学部	133	120	90.2%	6431	2376	36.9%
経済学部	79	73	92.4%	6333	1333	21.0%
経営学部	65	58	89.2%	9803	3149	32.1%
理工学部	281	271	96.4%	21987	8713	39.6%
都市科学部	109	97	89.0%	6481	1904	29.4%
短期留学プログラム(JOY)	5	4	80.0%	79	57	72.2%
全学教育	344	329	95.6%	18266	7634	41.8%

実施率については、授業アンケートをオンラインで実施するようになってから60%台に下がってしまいましたが、春学期は授業支援システムを使って遠隔授業を行ったことにより、100%に近い実施率となりました。しかし、回答率については36.3%と、低い値でした。これについては、従来の授業アンケートよりも設問項目数が増えたため、学生が負担を感じてしまったという可能性と、対面時であればその場で時間をとって回答してもらえたが、オンラインでいつでも回答できる状態が、逆に回答忘れ等を引き起こした可能性が考えられます。

### 2) 1回の授業あたりの学習時間

通常、授業アンケートでは授業外学習時間について尋ねていますが、今回は遠隔授業のため、「1回の授業あたりにどれだけの学習時間を費やしたか」という聞き方で尋ねました。全体的には「2時間」と回答した割合が最も多く(22.8%)、これは「1コマ90分の授業+30分の授業外学習時間」に相当します。全体集計の平均は128分ですが、これを対面授業だった昨年度春学期の平均(131分)と比較すると、「ほとんど変わらない」と言えます。しかし、本誌8ページの学生プロフィールの結果にあるように、週あたりの授業+授業外学習時間で見ると、対面時よりも増加していることが分かります。このことは、後述する「課題量」についての学生の負担感に関する議論に関係してきます。なお、この1回あたりの学習時間を遠隔授業形態別で見ると、ライブ配信や動画録画配信の授業の方が、音声付き画像・資料配信や資料のみ提供の授業よりも多いことが窺えます。資料のみ提供の授業については、3割近い回答者が1時間以下の学習時間であったことが気になりました(図1)。

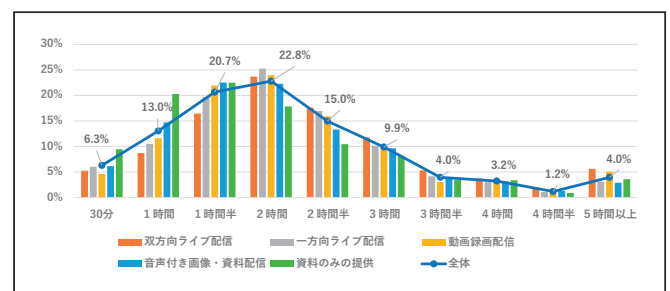


図1 1回の授業あたりの学習時間 (遠隔授業形態別)

### 3) 「学修意欲や身についた力」と「授業満足度」

2019年度秋学期に改訂した、「学習意欲や身についた力」について問う以下4つの設問についての結果は図2の通りです（選択肢は「非常にそう思う」(4)～「まったくそう思わない」(1)の4件法）。

- 3-1 授業の履修目標（成績評価の「優」のレベル）に到達するために、意欲的に授業や課題に取り組みましたか。
- 3-2 授業の到達目標（成績評価の「可」のレベル）に上げられていた知識や能力が身についたと思いますか。
- 3-3 授業の内容を理解できたと思いますか。
- 3-4 授業で対象とする学問領域への興味や関心が喚起されましたか。

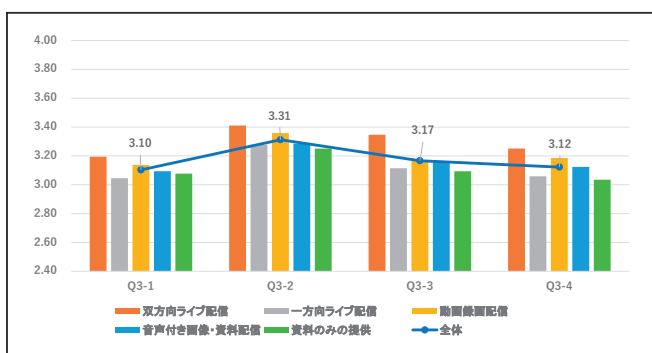


図2 学習意欲や身についた力（遠隔授業形態別）

昨年度秋学期の全体の平均値は、Q3-1から3-4までそれぞれ3.11、3.26、3.14、3.17であったことから、今回の結果は対面授業の平均値とほとんど同じであることが分かります。これは、全体的に見ると、「学修効果」という観点では対面授業と遠隔授業はほぼ同じ、と言えるかも知れません。ただし、遠隔授業方法別に見ると、双方向ライブ配信は、いずれの項目においても全体平均値よりも高い結果であることが分かります。

一方、授業満足度の全体平均を昨年度春学期の対面時と比較すると、今回3.15、昨年度3.31となっており、満足度については対面の方が若干評価が高いといえるかも知れません。

### 4) 自由記述分析—「課題」をキーワードとして

例年、高大センターとして自由記述に関しては分析を行っていませんでしたが、今回は初めての遠隔授業であったこと、また、特に「課題量が増えた」という学生からの声が学期を通してよく聞かれたものの、2)で述べたように、「学習時間」については数値上、著しい増加が見られなかったことから、自由記述について詳細に分析してみました。自由記述の延べ件数12,400の中から、「課題」をキーワードにして抽出された延べ件数1,936（記述者数1,043）の記述を一件一件読み、類似の記述内容を分類化した結果は以下の通りです。

まず、「課題や提出物が非常に多く、大変だった。他の授業も課題が多いものが多かったので、精神的にくるものがあった。」という記述に代表されるように、確かに「課題が多くて大変だった」という声は沢山書かれていましたが、同一の科目において課題量が「多い」と書いている学生もいれば「過不足なく丁度良かった」と書いている学生がいるケースも散見されました。このことから、個々の学生が履修している他の授業との兼ね合い（履修した科目数、課題が重めの科目を多く履修した等）、更にはアルバイト等の生活時間の違いによって、課題量に対する感覚に差が出ていることが窺えました。よって、課題量が多いと感じるか否かは、どのような科目をいくつ履修していたか、そして、個々の学生の生活パターンによって感じ方が異なることが考えられます。

ただし、学生が不満を感じていたのは、必ずしも課題の「量」だけではありません。自由記述を読み込む中で見えてきた問題は、課題の「質（内容）」や「フィードバックの有無」、「提出期限のタイミング」などがありました。まず、課題の「質（内容）」については、代表的なものとして

「課題を課すのなら、学生に何をさせたいのかを明確にし、具体的な言葉で指示を出すべきである。曖昧な指示でやられる課題ほど無駄なものはない。」

「毎回の課題が負担でした。以前からこのような形式だったのでしょか？これが出席確認の一環であるならば他の確認方法の検討をお願いしたいです。」

という記述がありましたが、これらのことから、課題を出す場合は、指示を明確にするだけでなく、「出席確認のためにただ何かをやらせてるだけでしょか？」と学生に捉えられないように、課題を出す意図の説明が時と場合によっては必要かも知れません。そうすることで、“無駄に”課題量が増えている、と捉えられる可能性を回避できるのではないかと思います。なお、出席確認が必要であれば、授業支援システムの【出席管理】機能を活用することができます。

次に、「フィードバックの有無」に関してですが、毎回課題が出て不満に思う学生が多い科目とは対照的に、課題が出ることで学生が満足している科目があり、その科目の特徴としては、課された課題に対してきちんとフィードバックがなされていることが分かりました。代表的な声は以下の通りです。

「自分の提出した課題に対してコメントが返ってくることで学習意欲が高まり、自分の頑張りが認められているようでとても嬉しかった。（中略）すべての講義で提出した課題に対してコメントが返ってくるとよりよい学びに繋がると思うためぜひ秋学期からそうしてほしい。」

「課題に対するフィードバックもいただいたことや、オ

オンライン授業でも自分が足りていない知識や能力を指摘していただけたことで、自らの成長につながったと考えます。全ての授業で、オンライン授業であるからこそ、提出した課題のフィードバックを何かしらの方法で学生に行うようにしてほしいです。」

一方、フィードバックがなかったことで辛い思いをした学生の意見の中に、「学生としては正しい知識を吸収できているのかわからない状態で、授業を進めること、毎週の課題をこなすこと、期末レポートに取り組むことが非常に苦痛でした。来学期がオンラインなのであれば、課題の量を減らしてフィードバックをできる環境を整えるべきだと感じました。」というコメントもありました。これらのことから、出した課題に対してフィードバックがあることで、学生の学習意欲が高まり、授業内容の理解が深まるのであり、最後に紹介したコメントにあるように、フィードバックが毎回できないようであれば、あえて課題量は減らして、その分、フィードバックができるようにする等、我々教員側の工夫が必要かも知れません。

最後に、「提出期限のタイミング」についてですが、「毎回の課題は原則翌日提出とのことだったが、難易度の高い問題が多く十分時間を費やさなければ解答できないものであったため締め切りが非常にきつかったので、課題の難易度を下げるか、提出締め切りをもう少し長くするという配慮があると良いと思った。」という意見があるように、課題提出までの期間が短いことで課題の負担がより感じられ、それが「課題量が多い」と感じる一因にもなっているようです。従って、課題の提出期限はある程度余裕を持たせた方が良いのかも知れません。

以上のように、本項では「課題」をキーワードに自由記述を分析した結果についてご紹介しましたが、今回の分析ではテキストマイニングの手法により、別の観点からも分析を行っています。その結果については、別途、報告書にまとめており、サイボーズ内に専用フォルダを設けて公開しておりますので、適宜、ご参照ください（報告書類へのアクセス方法については、本誌最後のページにてご確認ください）。

## 「遠隔授業に関する教員アンケート」からみる春学期遠隔授業の実態と課題

### 1) 教員アンケート実施概要

実施期間：2020年8月28日～9月22日

対象者：春学期授業アンケートを実施した科目（=自己点検票を作成する科目）の担当教員

回答科目数：255

回答科目数内訳：

経済学部	経営学部	教育人間科学部	教育学部	理工学部	都市科学部	国際戦略推進機構	全学センター系
21	29	9	31	85	28	43	9

ここ数年、自己点検票の作成フォーマット上で、FD活動に資するための情報を得る目的でアンケートを行わせていただいておりますが、今回は、授業アンケートを実施した952科目のうち、255科目から回答を得ることができました（回答率26.7%）。

### 2) 想定した講義・授業外学習時間等と授業アンケートに表れた学習時間、そして課題の量

図3は、授業相当時間と授業外学習時間をどのように想定したかについて、標準的な授業1回分を目安として時間数を尋ねた設問の、遠隔授業形態別集計結果です。対面授業であれば、1回90分の授業において、講義の他、個人ワークやディスカッション、グループワーク等を実施しますが、遠隔授業の場合は特にライブ配信型とオンデマンド型によって、かなりの違いが見られました。

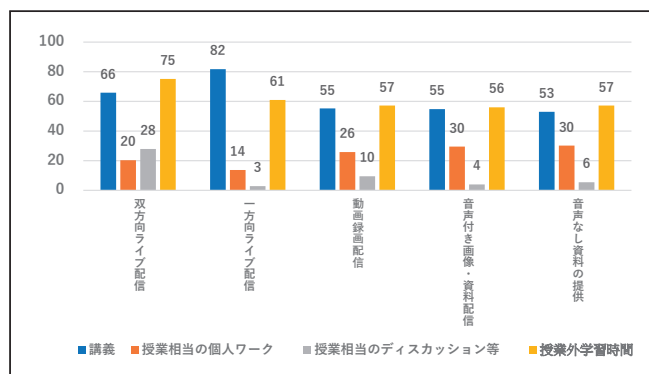


図3 講義や授業外学習時間等の想定時間の平均（分）（遠隔授業形態別）

講義時間については、一方向ライブ配信が最も長く（平均約80分）、それ以外は1時間前後であり、授業外学習時間については、双方向ライブ配信が最も長く（平均75分）、それ以外は1時間程度でした。教員・学生間や学生間での双方向性を担保するディスカッション、グループワーク、質疑応答といった活動は、やはり双方向ライブ配信において、ある程度の時間を確保して実施されていたことがここからも分かります。

この結果は、授業設計時に教員が想定した時間配分ですが、実際の学生の学習時間は授業アンケートでどのように表れていたのでしょうか。図4は、図3で想定した学習時間が授業アンケートの結果と合致していたかを尋ねた結果です。全体的に6割以上の科目が「ほぼ想定通り」であり、次いで多かったのが「想定したよりも多かった」（22%）でした。

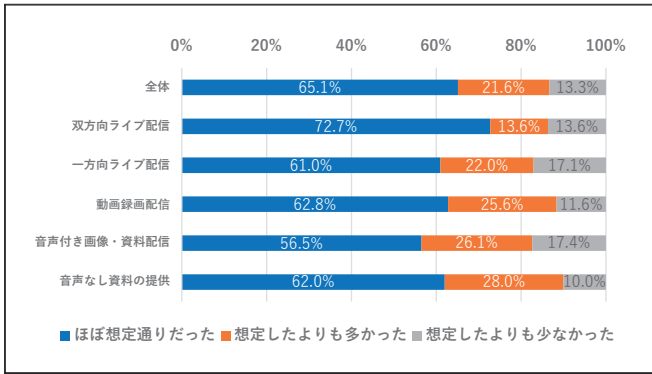


図4 授業アンケート結果に表れた学習時間

一方、当該科目において学生に課した課題の量は、昨年度と比較してどうだったかを尋ねた設問については、授業形態別でかなり異なっており、音声付き画像・資料配信科目においては、4割以上が課題を「増やした」と回答していました(図5)。先述の授業アンケートの自由記述分析のところでも課題量について言及しましたが、全体的には半数程度の科目では課題量は対面時と変わっていないとしても、学生が履修する科目のバランスによっては(=課題を増やした科目を多く履修していれば)、課題の対応に苦慮した学生がある程度いたことは、ここでも推測できるかも知れません。

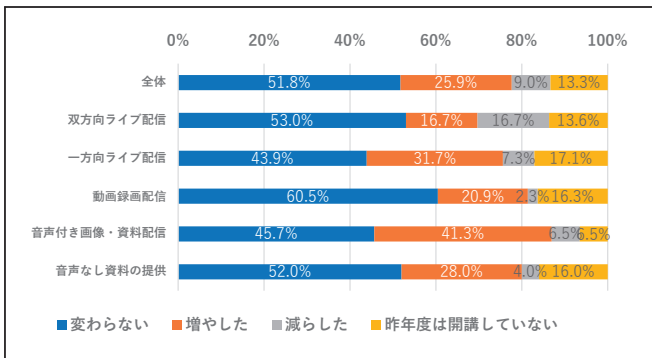


図5 課題の量

### 3) 学生へのフィードバック

本教員アンケートでは、学生に課した課題について、フィードバック(添削、コメント等)をしたかについても尋ねています。図6はその回答結果ですが、全体的に8割以上の科目において、ある程度の時間を要したケースもかなりあるものの、フィードバックが行われていました。ただし、フィードバックをまったく行わなかった科目も、特にライブ配信以外の授業形態において数パーセント存在しており、授業アンケートの自由記述で「課題のフィードバックが欲しかった」という意見が散見されていることから、今後はできるだけフィードバックを行っていただけるよう、改善をお願いしたいと思います。

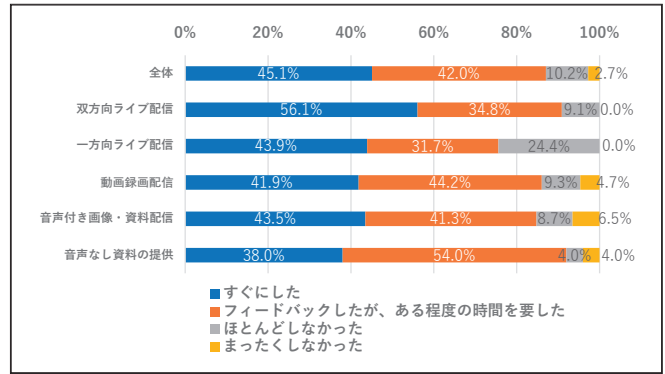


図6 学生へのフィードバック

### 4) 期末試験の実施方法と不正防止対策の有無

期末試験については、図7が示すように、試験を行わなかった科目が約23%ありましたが、実施された科目において、最も多かった方法は「期末レポート」でした。期末試験において、不正防止対策を行ったかを尋ねた項目については、全体的には行っていない科目の方が行った科目の数を上回っていましたが(図8)、不正防止対策を行った科目について、具体的にどのような対策を行ったのかを尋ねたところ、以下のような回答が得られました。

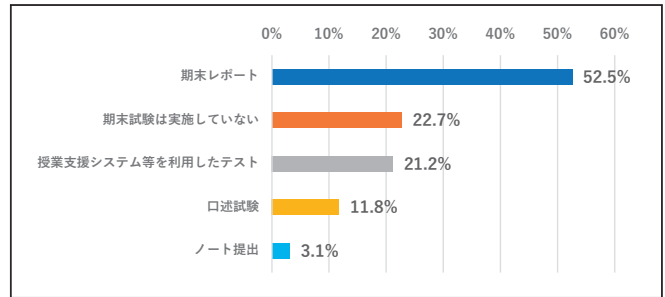


図7 期末試験の方法

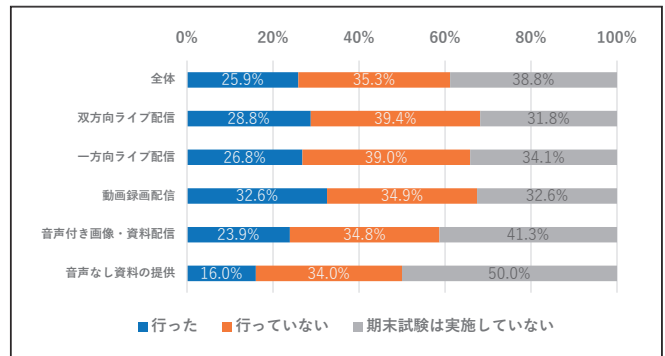


図8 期末試験の不正防止対策

**【注意喚起】**

- ・授業支援システムのお知らせ発信により、全受講生に不正を行わないように一斉通知を行った。
- ・不正の場合に処分されることについて事前及び当日の周知。
- ・事前に「実施要項」を配布し、実施時間帯に受講生同士の情報交換を禁じ、類似答案があった場合は、いずれも採点評価しがたい旨を告知した。
- ・期末試験説明用動画で、不正をしたらどういことになる可能性があるかを注意した。

**【直筆】**

- ・試験時間内に自筆で書いた回答をスキャンか、Cameraで撮影させ、提出させることで、コピーアンドペーストは回避できたと思う。
- ・あらかじめ簡単な課題を手書き画像で提出させた後、期末レポートも手書きの画像ファイルの提出を指示。要約とキーワードも要求して、単純なコピペや別人による代筆をしにくくした。

**【その他】**

- ・LMS上で設問と選択肢をランダム表示にした。
- ・事例問題とし、コピーペーストが容易ではない形式にした。
- ・学生によるオリジナルな問題の作成。
- ・回答が同一とならない課題解決型設問。
- ・実際の授業時間に合わせて問題を配信し、試験時間も短めに設定して、一斉に提出させた。

**5) 遠隔授業の良かった点・困った点**

本教員アンケートの最後の項目では、遠隔授業で良かった点および困った点について尋ねました。

**【良かった点】**

遠隔授業の良かった点として、以下6つの選択肢を提示しましたが（複数選択可）、最も多かったのは「オンライン授業の可能性が分かり、対面に加え、授業運営（工夫の仕方）の幅が広がった」でした（67.6%）（図9）。

- 1 対面時よりも学生からの質問や意見が増えた
- 2 既定の授業時間に縛られず、時間的制約がなくなった
- 3 オンライン授業の可能性が分かり、対面に加え、授業運営（工夫の仕方）の幅が広がった
- 4 授業の準備が楽になった
- 5 キャンパスへの移動がなくなった
- 6 その他（自由記述）

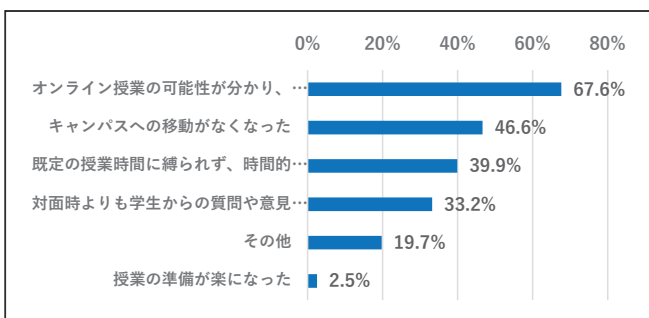


図9 遠隔授業の良い点

一方、「授業の準備が楽になった」の回答者は2.5%に過ぎず、図10に示すように、遠隔授業になって授業の準備に時間がかかったと感じた回答者が大半でした。「その他」を選んだ回答者による自由記述例は以下の通りです。

**【学生の受講態度】**

- ・アンケート機能を利用することにより、教室では手を挙げないであろう学生からの意見も得ることができた。
- ・学生の出席率、課題の提出率が極めて高かった。
- ・学生も通学の時間を節約し、教室で一番前で聞くように見やすく授業を受けられることは良かったと思う。
- ・他人から答えを教えてもらうことが容易でなくなったため、個人個人が講義内容を、時間を使って、ちゃんと考えている様子が見えがえる。その結果、例年の講義よりも学生の理解が深まっているようである。

**【学生の学習の効率化】**

- ・授業時間以外のグループワークもオンラインで可能だったので例年以上に予習復習の時間が取れていたことが印象的だった。
- ・アーカイブを利用して復習する学生が増えた。
- ・オンデマンド式だったので、学生がわからないところを動画で何度も確認できた点。
- ・学生が自分のペースで視聴できること。
- ・受講生が自由な時間帯で受講できたためか、学期途中で脱落する学生の数が例年よりも少なく、成績が「不可」になる学生の割合が少なかった。

**【授業運営の効率化】**

- ・試験を授業支援システムで実施したことで採点が楽になりました。
- ・学生からの課題がデータで送られるので、登録、集計、分析が行いやすい。
- ・資料配信型であったため、板書にかかる時間が無くなった分、従来に比べてより深く詳しい話ができたと感じる。
- ・学生の理解度に応じて、個別に課題の設定や授業の進行をコントロールできたこと。
- ・移動のコストが減った分、授業にリソースを割けることができた。
- ・外部講師を活用する場合は、本学への来学が不要になるため、いろいろな面で効率が良い。

**【授業改善】**

- ・自分自身もアーカイブを視聴することで、授業改善点を発見することができた。

**【困った点】**

遠隔授業の困った点として、以下6つの選択肢を提示しましたが（複数選択可）、最も多かったのは「授業の準備に時間がかかる」で、回答者の8割を占めていました（図10）。

- 1 学生の反応が分からない／分かりづらい
- 2 授業の準備に時間がかかる
- 3 対面時よりも課題量を多くした為、添削やコメント作成が負担

- 4 学外講師への対応
- 5 自宅の通信環境
- 6 その他（自由記述）

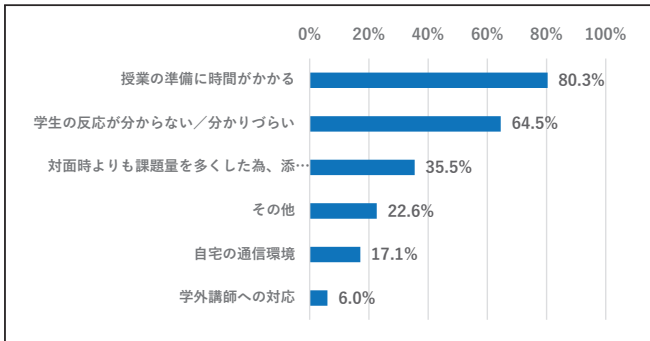


図10 遠隔授業の困った点

回答者の半数以上を占めていたもう1つの意見は「学生の反応が分からない/分かりづらい」です（64.5%）。「その他」を選んだ回答者による自由記述例は以下の通りです。

#### 【学生に関する問題】

- ・不正・ズルの蔓延。
- ・学生のPCやネット環境の不備が見られた。そうした不備から挫折していった学生がいたように感じる。
- ・他学部の履修者が大量に発生し、バックグラウンドや履修目的が異なる学生が多くて大変だった。
- ・オンラインだと、どこまでが個人の力で本当に課題を解いているのかわからない部分がある。まじめな学生はいろいろと調べてから課題に解答するので、結果的に点数があがり、「優」や「秀」が例年より大幅に増えた。

#### 【授業運営関連】

- ・教室のキャパシティの問題がなくなったため、履修者数が昨年の1.5倍に増えており、採点や学生対応の負担が増えた。
- ・課題の量は変わらないが、学生の記述内容が増えた等で、コメント作成が負担になった。

- ・紙ベースの場合と比べて、デジタルファイルによる採点は数倍の時間がかかる。
- ・積極的な学生は、オンラインでも同じように発言などをしたが、あまり積極的でない学生や聞いているのかわからないような学生に対して、対面ならその場で声をかけたり、グループワーク時の机間巡視で声掛けができるが、オンラインの場合は、通信環境の配慮から学生のビデオオンを強要できず、踏み込みづらいつと感じた。
- ・講義と同時にリアルタイムでチャットでのコメントのチェックをして反応していたのでリアルでの授業よりも若干気を使うし、疲れる面があった。

#### 【その他（大学側への要望）】

- ・通信費の自己負担額が厳しい。通勤手当の代わりとなる通信費の手当てが必要ではないか。
- ・授業方法でなく、機材、設備環境への援助が少しでいいので欲しかった。
- ・Zoomの企業用アカウントを受講生数などとは無関係に教員全員に事前に割り当てて欲しかった。
- ・インターネット環境が十分でない学生とそうでない学生との間に大きな格差が生まれた。そこを平等に補填していく必要がある。

## おわりに

本報告では、学生および教員に対して行なったアンケートの結果を通して、春学期遠隔授業の実態と課題についてみてみました。秋学期も原則的にオンライン授業となり、次年度については新型コロナウイルスの感染拡大状況を見ながら授業が実施されることとなりますが、今後の大学教育では、対面とオンラインを併用させた「ハイブリッド型」授業が広まることは間違いないと思われます。今回のアンケート結果から見出された課題を踏まえ、今後のオンライン、そしてハイブリッド型授業においてよりよい授業づくりができるよう、高大センターとしてFD活動を更に充実して参りたいと思います。



## 大学教育の質保証 ④

## 速報：学生は遠隔授業をどう受け止めたか

大学院教育強化推進センター／高大接続・全学教育推進センター 市村 光之

新型コロナウイルスの流行に伴い、遠隔授業という想定外の事態が続いています。私たち教職員は試行錯誤の連続でしたが、学生たちも大学構内立ち入りが制限され、対面授業が受けられない状況に戸惑い、様々な不便や不安を抱えながら学業を続けています。今回はそうした学生たちが、遠隔授業をどう受け止めたか、がテーマです。

高大センターでは、前年度で完了した大学教育再生加速プログラム（AP事業）により、学生が主体的に学びをデザインするツールとしてのYNU学生ポートフォリオを整備しました。学部生全員が半期ごとに入力する「学生プロフィール」では、学修・生活行動を測定しています。秋学期は遠隔授業の動向について、45問の設問により学生たちの実態を明らかにすることを試みました。10/16に入力を締め切り、現在集計・分析中ですが、その一部を速報として紹介します。なお、詳細な報告書は11月中に公開予定です。

## 課題が多すぎる、という学生の叫び

「課題が多すぎる」という声が、本学に限らず全国の大学生たちから聞かれます。外出もままならず、対面の交友もできない状況で部屋に籠り、ひたすらパソコンに向かい遠隔授業を受講する学生たちの悲痛な叫びです。筆者が春学期開講1か月の段階で担当科目（1年生中心）で実施した「遠隔授業動向 予備調査結果」（6月にFDセミナーで各学部で紹介）や履修生へのヒアリングから整理すると、学生の「多すぎる」には複数の意味があるようです。

- ①個々の課題の量（所要時間）は少ないが、回数が多い：これが最も多そうです。特に下級生は十数科目履修していますので、毎週科目の数だけ課題をこなさなければなりません。タイムマネジメントをしっかり意識して実行しないと提出期限に間に合いません。
- ②1回ごとの課題の量が多い：①の一部には量が多い科目もあるでしょう。履修科目が多い学生は1科目に使える時間は限られますので、こなすのが大変です。
- ③課題が難しすぎる：講義内容に比べ課題のレベルが高度すぎる、と学生が感じる課題もあるようです。講義内容が説明不足なケースと、課題が難しすぎるケースが考えられます。つまり授業設計の問題です。
- ④課題に関する説明がわかりにくい：課題の指示内容が曖昧で何をすればよいかわからなかったり、それに取り組む意図がわからなかったり、説明不足もあるようです。対面やライブ授業であればその場で質問できま

すが、遠隔授業では、確認に時間がかかります。課題の意義がわからなければ、取り組む意欲も湧きません。

- ⑤提出物に関してフィードバック（評価やコメント）がない：量の問題と共に、この不満が多いと感じます。提出した課題を教員が受け取ったかどうかかわからない不安、提出した内容が妥当かどうかかわからない不安、さらに反応がない中で課題を提出し続ける虚しさなどが入り交じり、学生たちは精神的に辛い思いをしています。

加えて、他者との交流がない状態で部屋にこもって、ひたすらPC画面とにらめっこの状態は精神的にも辛く、眼精疲労や頭痛、肩こりなど、心身の不調を感じる学生が多そうなのが心配です。

## 週あたり学修時間は3時間増加

では、春学期の実態はどうだったのでしょうか。図1は、今回の学生プロフィールで測定した春学期の学修・生活行動の週あたり時間の全学平均を、昨年春学期と比べたものです。授業相当時間と授業外学修時間は3.3時間増加しており、1日換算で25分程度増えたこととなります。授業や授業外学修が増えると授業と係わらない自主勉強は圧迫されて減りそうですが1.6時間増加し、就活関連も0.3時間増加しましたので、学業・就活などの社会活動で合計5.2時間増加したことになります。グラフは示しませんが、1年生から3年生までは全学部で増加しています。一方、4年生は前年度と変化はありませんが、これは履修科目が少ないからでしょう。

逆に社会活動で減少した項目としては、部活・サークル活動が3.5時間、アルバイトが1.5時間、通学時間1.6時間で、合計6.6時間です。これら減少した時間が、上述の学業・就活などの社会活動の時間に充当された形で

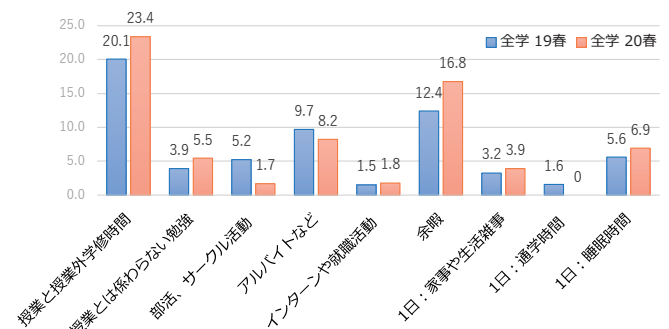


図1 学修・生活時間の推移（週あたり全学平均）



す。さらに、プライベートな生活時間を見ると、余暇は4.4時間、家事や生活雑事は0.7時間、睡眠も1.3時間増加しています。課題の増加に伴う学業が負担で余暇や睡眠が圧迫されているわけでもなさそうです。

学生たちが実態に即した時間を入力した前提で考えると、これらのデータからは「時間」の観点で、遠隔授業に伴い変化した学業が学生たちの生活を圧迫していることにはなりません。つまり、学生たちが感じる「課題が多すぎる」は、学修時間という意味での量ではなさそうです。

## 授業+課題の内容/量の適正化と、フィードバックがカギ

図2は「遠隔授業になった春学期は1科目当たりの課題が増えたと思うか」を尋ねた結果です。88%の学生が増えたと感じており、2倍または3倍以上の回答が過半数です。遠隔授業になり学生の反応がわかりにくいことから、各科目で課題により修得度をみる頻度が増えましたので、課題の数は確かに増えました。グラフは示しませんが学部別にみると、教育学部、理工学部で課題量が増えたと感じる学生が多いようです。経済学部、経営学部も増加したと答えた学生が多いですが、他学部に比べると、これまでと変わらない、または減ったと感じる学生がやや多いです。

次に、図3の「課題量の増減に伴い、授業1回当たりの全体の学修時間は変わりましたか」の回答を見ると、少し様子が変わります。1科目当たりの課題が増えたとの回答は88%（図2）ですが、授業1回当たりの学修時間が増えたと答えた学生は65%に留まるのです。課題は増えたが授業時間は減っているため変わらないと答えた学生も16%います。対面授業であれば授業時間はキッカリ90分ですが、遠隔授業では科目により、録画視聴60分のように講義が減り、課題の負担が増えても相殺されたということです。さらに、減ったと答えた学生も11%存在します。これはたとえば、録画動画配信型授業を視聴する時間が30分で、その後の課題が120分と想定した授業

で、課題の所要時間が60分で済んだケースが考えられます。対面授業で講義90分+授業外の課題60分の授業を、遠隔授業で講義相当30分+自主学習や課題120分で設計した場合、合計時間は同じですが、学生は授業外学修の時間が大幅に増えた分、負担感が大きくなり、授業1回当たりの学修時間が増えたと回答するケースもありそうです。課題の数は増えましたので、それらを期限内に次から次へとこなす精神的負担も、増えた感の増加に拍車をかけている面もあるでしょう。

なお、図3では授業1回当たりの学修時間が増えた人は65%、減った人は11%ですので、週あたりの全体の学修時間は大幅に増えてよいはずですが、図1では3時間の増加に留まっており、やや乖離があります。実数字で回答する設問と、感覚的に回答する設問の差かもしれません。

次頁の図4は、課題の負担要因を学年別にまとめたものです。課題の回数と1回ごとの量が1~3年生の主な負担要因になっています。各課題の所要時間は学生本人の能力や手際の良しあしにより、個人差があります。そうした個人差が最小限になる適正な難易度と量を見極め、課題を設定するのは簡単ではないでしょう。今後、経験を蓄積しつつ適正量を探らなければなりません。

加えて1年生では、フィードバックがないことを挙げた人が35%と、上級生に比べ突出して多いのが目立ちます。思い起こせば筆者も、新入生の時はレポート課題の評価基準がわからず、どこまで質を高めれば単位が取れるのか、と不安を感じたことを覚えています。提出した課題への評価や教員からの反応がないまま、確認や相談ができずに課題に取り組み続けるのは辛いでしょう。「課題が多すぎる」という学生たちのことには、単に課題の量や頻度だけではなく、そうした不安感や孤立感も含まれています。大学での対面授業やレポート課題等を経験せずに遠隔授業に突入した分、言うまでもないことですが、特に新入生には特段の配慮が必要です。

授業時間が時間割で定められた対面授業と異なり、遠隔授業では授業形態も実施時間もさまざまです。講義に相当する内容と授業外学修（課題等）をいかに組み合わせ、適正化を図るか。部屋に籠りひたすらPCに向かう

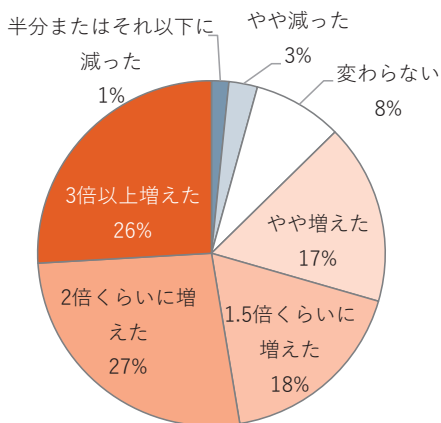


図2 春学期は1科目当たりの課題が増えたか

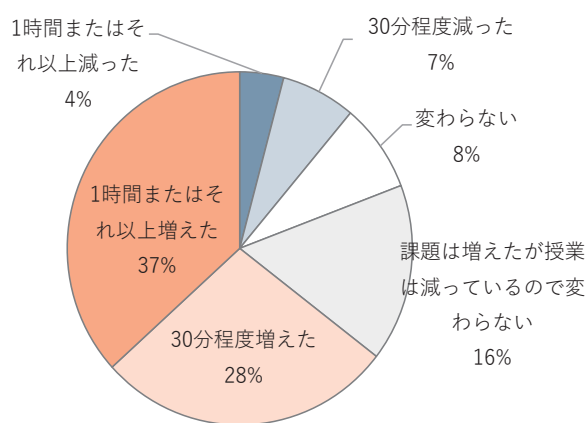


図3 授業1回当たりの全体の学修時間は変化したか

学生たちに、いかに課題のフィードバックや学習の助言をするか。教員側の負担もあります。学生たちが無理なく学業を進めるために、授業設計上の喫緊の課題と言えます。

これまで課題を課さなかった科目を含め、毎回のように課題を課す状況になりました。筆者の個人的な見解になりますが、講義と課題をうまく組み合わせることができれば、より学修効果を高める授業を実現できそうです。大学設置基準には、授業時間（2単位科目であれば1回あたり2時間）と授業外学修時間（同4時間）が定められていますが、残念ながら実態は異なります。そうしたそもそも論を含め、今は大学教育のありかたを再検討する好機かもしれません。

## 評判がよくない資料のみ提供型授業 今後の可能性は？

前述の春学期「遠隔授業動向 予備調査」で浮上したもう一つの課題は、資料提供のみの授業タイプでした。

「授業料を払ってるにも拘らず資料を読むだけでは代替になっていない」、「気楽にできるが一番退屈」、「科目により資料の質の差が大きい」、「資料だけでは理解がむずかしく、質問してもなかなか返事がこない」などの不満の声が学生から挙がりました。春学期の授業アンケートでも、満足度等が最も低かったのがこの授業タイプでした。

図5は、「講義中心の授業であれば資料のみの提供型でよいと思うか」を訊いた結果です。全学平均では賛成54.0%、反対46.0%と拮抗しつつ賛成派が勝ります。学部別では経済、経営、教育学部で賛成派がやや多く、理工、都市科学部では反対派が多いです。グラフは示しませんが、学年別に見ると1年生は反対派がやや多く、2年生以上では逆転します。

心配したほど反対派は多くありませんでした。この結果をどう解釈するか。この数値データだけでは推測にすぎませんが、1つには講義中心の授業に限定して質問したことがあるでしょう。わかりやすく工夫した教材を資料として提供した科目、開講段階では不十分でも途中から学生の声を反映し改善した科目もあるでしょう。一方

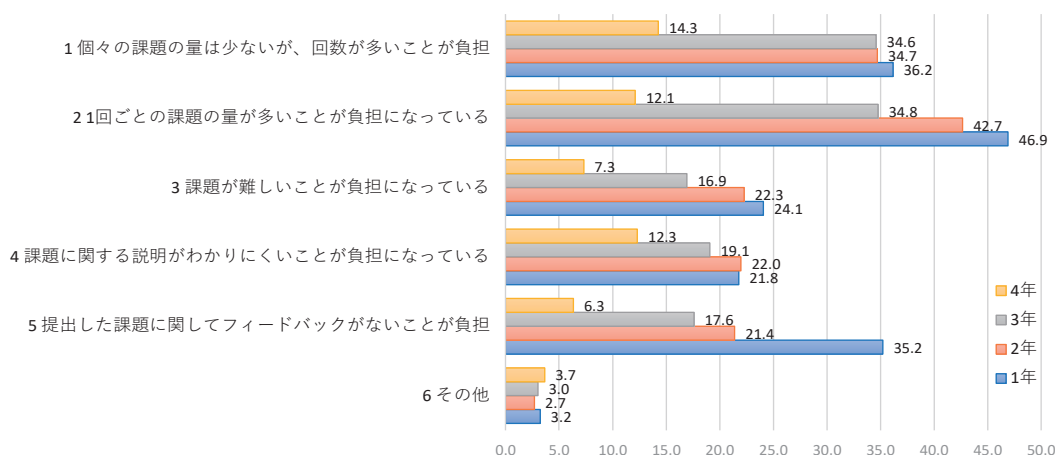
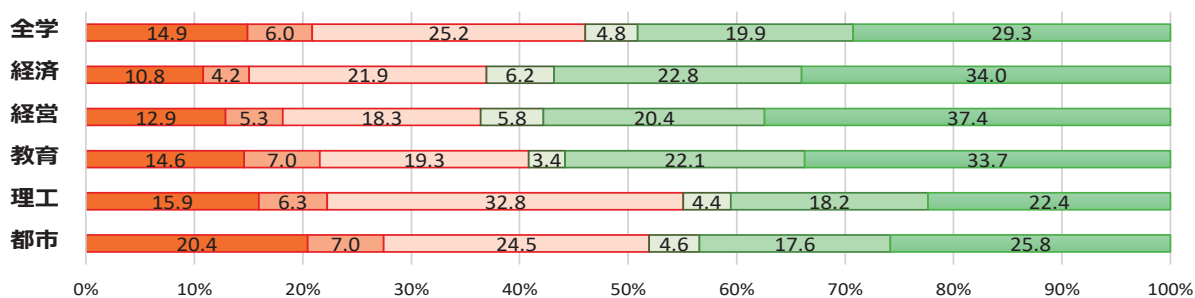


図4 課題などが物理的・精神的に負担になっているか (主な要因を最大2つまで選択)



- 大学の授業としての価値がないので、資料のみの提供でよいとは思わない
- 授業の臨場感がなく集中が続かないので、資料のみでよいとは思わない
- 説明がないと理解に限界があるので、資料のみでよいとは思わない
- 教員や他の学生に会う必要がなく気楽なので、資料のみの提供でよい
- 授業支援システムやチャット等で質疑応答あれば、資料のみでよい
- 時間を気にせず自分のペースで学習できるので、資料のみでよい

図5 講義中心の授業であれば、資料のみの提供型でよいと思うか

で、資料を読むだけで単位を稼げるなら楽でよい、と考えた学生も少なからずいるように思います。

全学平均で最も多い回答は「時間を気にせず自分のペースで学習できるので資料のみでよい」です。この回答には、講義を聴くだけの授業なら資料を読むのと同じ、通学の手間が省ける等のニュアンスも含みそうです。大学の講義を聴くことと、資料を読んで自学自習することが等価値なのでしょうか。時間を取って通学してでも聴く価値のある「講義」を提供できなければ、大学の存在意義はなくなります。

全学平均で2番目に多い回答は「説明がないと理解に限界があるので、資料のみでよいとは思わない」です。講義を聴く、資料を読むなどの一方向の学びに加え、質疑応答や議論など双方向の対話により思考も理解も深まります。3番目に多い回答は「授業支援システムやチャット等で質疑応答があれば、資料のみでよい」です。資料を読むだけの一方向では不十分ですが、ツールをうまく活用することで補える部分がありますので、遠隔授業を続けざるを得ない状況下ではそうしたツールの活用は不可欠です。

さらに、資料を読むだけでは「大学の授業としての価値がない」という厳しい見方をする学生も14.9%おり、こうした意見も謙虚に受け止めるべきでしょう。資料を読む作業は授業の本体というよりも事前学修の位置付けにし、読後はチャット等に限らずライブ配信型で質疑応答やディスカッションに充てることで、対面授業に劣らない授業方式に進化させられます。いわゆる反転授業の発想によるハイブリット型遠隔授業です。

## 大学とは学生にとって 交友やサークル活動の場か？

最後に、遠隔授業や学内への入構規制がある現状で、学生たちは何を最も不便または欠点と感じているかを

見てみましょう。「大学の友人と会えないこと」が全学平均で34.7%と突出して多く、「課題が増えたこと」が20.9%、「サークル活動等の学内活動がしにくい」が18.4%、「対面でない分、集中が途切れがちなこと」が17.3%と続きます。課題の多さが世間でもクローズアップされていますが、そうした遠隔授業手法の問題よりも、交友や学業以外の活動ができないことに学生たちは不都合を感じています。他大のアンケートでも同様の結果が出ており、結局学生は学業よりも交友や学業以外の活動が大事、と嘆く大学関係者もいます。しかしここは、大学側が教育、つまり授業の遠隔実施を最優先に進めた結果であり、学業以外の交流の場作りが大学として次に取り組む課題と解釈したいです。

図6はそのデータを学年別に集計したものです。「友人と会えないこと」に加え、「対面でない分、集中が途切れがちなこと」、「議論等、他者から触発される学び・刺激が減ったこと」が上級生と比べ1年生で突出しています。大学生生活未経験の新入生たちには格段の配慮やサポートが必要で、次年度、新入生を迎え入れるにあたっての課題です。

「課題が増えたこと」が1年生でなく2年生で目立つのは頷けます。2年生は対面授業だった1年次に課題等の授業外学修が少ない環境で学んできたので、前年度と比べて課題の負担感が一層強いのでしょうか。「卒論研究、実験等の研究活動がしにくいこと」は4年生で突出しています。遠隔授業の手法で補えない部分が多いので、これも次年度に向けた課題です。

なお、本調査結果は現在集計中で、11月下旬を目途に詳細な報告書を下記より公開します。ぜひご一読ください。

サイボウズのファイル管理を開く  
高大接続・全学教育推進センター>学生ポートフォリオ>  
2020年と順に開く

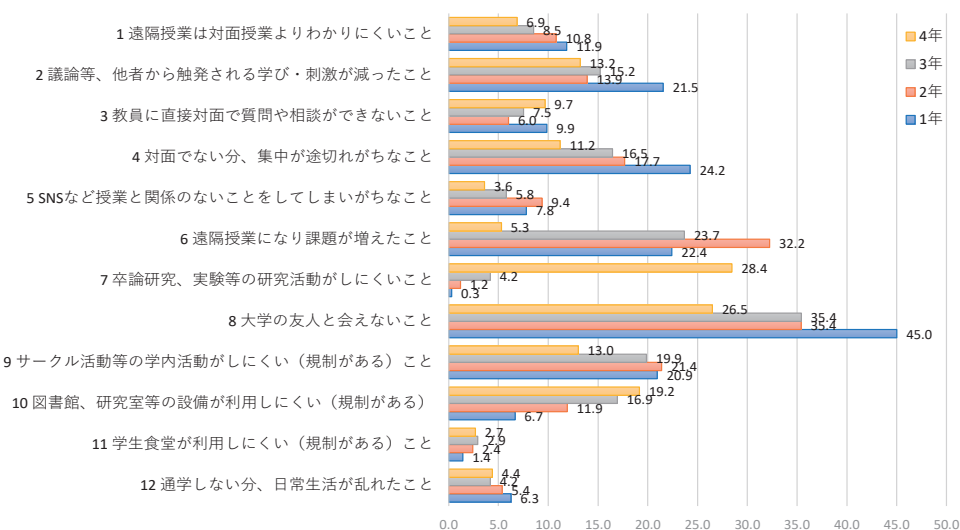


図6 遠隔授業や大学への入構規制が、不便または欠点と感じることは何か(主要要因を最大2つまで選択)

# CENTER NEWS

## 開催報告 2020年度 横浜4大学 第6回ヨコハマFDフォーラム

本学は、横浜市内にある3つの大学（神奈川大学、関東学院大学及び横浜市立大学）とFD活動の連携に関する包括協定を締結し、FDに関わる活動を進めています。その活動の一環として、毎年度「ヨコハマFDフォーラム」を開催していますが、今年度は以下の要領で開催することとなりました。

開催日時：令和2年12月5日（土）13：00～16：30

開催方法：オンラインライブ配信

テーマ：横浜4大学におけるオンライン授業の実施状況・課題・展望

～学生とともに考えるウィズ&ポストコロナの大学授業～

開催趣旨：「ヨコハマFDフォーラム」ではこれまで、FDの包括協定を締結する横浜4大学によって過去5回にわたり、学習意欲、大人数授業、学生調査、アクティブラーニング地域連携教育（PBL）など、FDと大学授業に関する「王道」ともいべき中心的トピックを議論してきた。とりわけ、新型コロナウイルス感染症（COVID-19）の影響によって「新しい生活様式」が求められる現在における最大の関心事の1つは、現在多くの大学で導入された「オンライン授業」であろう。オンライン授業の導入開始からまもなく1年になろうとしている現在（20年12月）、横浜4大学におけるオンライン授業に関する経験や知見を共有する。特に、これまでの本フォーラムの特長を受け継ぎ、今回も学生を交えて大いに議論することにしたい。

本フォーラムの詳細は、チラシ等の案内資料が完成次第、各部局の事務方を通してご連絡いたします。今後も実施されるであろうオンライン形式の講義について考える機会として、多くの教職員の皆様のご参加をお待ちしています。

## — 高大センターからのお知らせ —

### 2020年度秋学期授業アンケートの実施について

第4ターム：2020年11月18日（水）～12月8日（火）

第5ターム／秋 semester：2021年1月19日（火）～2月9日（火）

※授業アンケート実施対象科目は、ゼミ、教育実習、卒業研究関連科目を除く、履修者10名以上の科目となります。対象科目であれば、アンケートフォームは冬休み明けの1月上旬に授業支援システムの講義編集画面に自動的に登録されます。万が一、対象科目であるにも拘らず講義編集画面にアンケートフォームが表示されない場合は、高大接続・全学教育推進センターまでメールにてご連絡ください（aec-fd@ynu.ac.jp）。

### 授業アンケート実施にあたってのお願い

春学期に行った授業アンケートの経験から、アンケートへの回答呼びかけを積極的に行っていただかないと学生は回答しない、もしくは回答を忘れる傾向にあることが分かりました。特にオンデマンド型で授業を実施する先生におかれましては、アンケート実施期間になりましたら、授業支援システムの「お知らせ発信」にて、もしくは講義連絡時に、回答を積極的に促していただけますようお願いいたします。

### 学生IR、FD活動の報告書類の公開

学生の学修・生活行動の分析結果や卒業・就職先調査結果など、各種学生IRおよびFD関連の情報は、関連する会議体や教授会でのFDセミナーにおいて報告しておりますが、よりタイムリーに関係各部局に展開すべく、サイボーズ内に公開フォルダを設け、関係各部局にて適宜参照・入手できるようにしています。必要に応じて学生サポートや教育改善にご活用ください。

- 格納先：サイボーズ > ファイル管理 > 高大接続・全学教育推進センター
- 提供文書の取り扱い：学内限定公開（本学教職員のみ）を含みます。学内限定公開文書のダウンロード後の取り扱いについてはご配慮ください。